

2021 年度大学評価委員会経営部会の評価を受けて

法政大学総長 廣瀬克哉

2021 年度の大学評価委員会経営部会による評価結果をいただいた。今年度は①コロナ禍およびアフターコロナを見据えた「学びの質」向上について、②ブランディング活動への取り組みについて、の2項目について評価をお願いした。①をテーマとして取りあげたことは説明を要しないだろう。2020 年春に応急対応として始まったコロナ禍への対応は、大学全体のレベルでも、個々の教職員学生の活動レベルでも、走りながら考え、状況の変化にその都度対応していくことの積み重ねだった。それが2年度目に入っているいま、あらためて客観的な視点から評価をいただけたことは大変貴重な振り返りの機会となった。

オンライン授業に関するアンケートなどを行って改善を図りつつ展開してきた教育活動の取り組みについて一定の評価をいただいた。しかし、「走りながらの自己点検」であるがゆえの、経年的な評価分析を行うためのデータが途切れてしまった面があること、振り返りの結果を全学に周知・共有するFD活動はもっと展開する必要があるのではないかと、今後活かしていく必要のあるご指摘をいただいた。

②のブランディング活動については、教職員・学生の参加するボトムアップのプロセスによってブランドの概念を明確にしていく作業に始まり、その後展開し続けて来た内容について、持続性と広がりにおいて高く評価できるとの総評をいただいた。しかし、キーワードである「実践知」についての理解を深めるための方策については、まだまだ展開の余地があるのではないかとご指摘をいただいた。なかでも、現在重点的に取り組まれている、個別的な活動をクローズアップする方法に加えて、今後はそれを体系化して示していくような取り組みが必要ではないかとの指摘は、とくに納得のいくものであった。例えば「法政大学実践知叢書」のようなシリーズによる発信を勧めたいというご提案は魅力的だ。内容の性質上、すぐに実現するというよりも、あらためて企画を練り上げるところから一定の時間をかける必要のあることだが、それに取り組むこと自体が、ブランディング活動のレベルアップにつながるであろうことが想像できる。具体的に検討を進めたい。

なお、今回の評価に当たっては、評価プロセスと、評価資料について改善を求めるとご指摘もいただいた。外部評価は、内部における自己評価の結果を提示して、それに対する評価としてお願いすることが一般的で、たとえば認証評価の受審などもそのように行われる。しかし今回の評価に当たっては、特に①についてはまだ走りながら考えている渦中のことがらであり、生データをお渡ししてそれで評価をお願いするような形とならざるを得なかった。負担の多いそのような方法での評価を担っていただいた評価委員の先生方にあらためて感謝申し上げるとともに、今後の外部評価のプロセスについても再検討をしていきたい。